

## 27. 癌末期利用者にトータルペインからアプローチを試みた 1 症例

介護老人保健施設 ベルアモール

看護師 山本佳寿恵（やまもと かずえ）

共同発表者 飯田貴士

---

### 【はじめに】

がん疼痛は、進行がん患者全体では 70-80%の患者に存在すると言われている。介護老人保健施設であるため、使用できる薬剤に限りがあり疼痛コントロールも限界がある。今回、コロナ禍により家族との面会に制限がある中で、トータルペインからのアプローチが本人と家族双方に効果的であった 1 症例を報告する。

### 【事例紹介】

A 氏 70 歳代 男性。肺癌・横紋筋融解症・認知症・脳梗塞後遺症。妻と同居。子どもなし。X-1 年 1 月 認知症や脳梗塞後遺症による介護負担が大きいため当施設へ入所する。5 月より腰痛出現。癌脳転移により左麻痺、言語による表出も困難となる。医師より腰痛は骨転移の可能性があること、肺の機能も悪化している事を妻へ説明し、施設での看取りを希望されターミナルケアが開始となる。

### 【実施と結果】

トータルペインの 4 つの側面についてアセスメントを行い、多職種と協議・連携しながらアプローチを実施した。①身体面について、腰痛に対しカロナール内服や湿布を貼用するが疼痛軽減せず、体動や不眠を認めた。そのため訪室時緊張を緩和するためのマッサージを施行した。また、エアマットの導入やポジショニングで安楽な体位になるように努めた。②スピリチュアル面について、痛みによる不安感や恐怖心を和らげるようタッチングや声掛けを行った。③社会面について、家族や飼い犬の写真を枕元へ配置する。個室へ変更し、いつでも面会可能とした。④精神面について、妻へ電話をかける支援や妻の話題を通して身近に感じてもらう配慮した。また犬の散歩が日課で外出することを好んでいたことから、屋外へ出る方法を多職種で検討し、通常面会の場所として使用しないベランダを設定した。妻と穏やかに過ごしたこの時間は腰痛の訴えもなかった。帰室後、A 氏は手を合わせ「ありがとう」のジェスチャーを何度も行っていた。逝去 3 日前には状態急変に備えベッドのまま移動し、可能な限りベランダでの面会を継続した。全般的に反応は乏しくなっていたが、面会中は反応よく表情もしっかりしていた。妻は涙ぐみながら笑顔で対応し夫の写真を撮影していた。グリーフレターには、当施設で夫との思い出ができたと感謝の言葉が綴られていた。

### 【考察】

提供できる薬剤に限りがあってもトータルペインの視点で関わることは、何よりも代え難い「心の処方箋」となっていた。治療抵抗性の苦痛を持った患者へのケアにおいては、積極的な全人的ケア（total care）が必要と言われている。コロナ禍の面会制限により、心の拠り所である妻と会えない寂しさや不安がある A 氏に対し、今回の支援は痛みの緩和因子を増やし疼痛閾値をあげる要因となった。また、家族ケアも含め取り組んだことで妻のグリーフケアの一助になった可能性もある。これらの取り組みは、癌末期で痛みを抱えながらも最期まで本人らしく過ごせる有効な関わりであることが分かった。